

坂元忠芳教授を送る

茂木 俊彦

坂元忠芳教授は、1995年3月をもって本学を定年退職される。本号は同教授の退職を記念して編集した。

坂元教授は東京大学教育学部学校教育学科を卒業後、川崎市の小学校に教師として3年間勤務した。その後ふたたび大学にもどり、東京大学助手を経て同大学院修士課程、博士課程に学び、1967年から75年まで日教組の設立になる国民教育研究所の所員として研究に従事した。1975年に東京都立大学人文学部教育学専攻学校教育講座の助教授に着任、83年教授となった。

また学外でも教育科学研究会（現在、副委員長）、地域民主教育全国交流研究会（現在、世話人副代表）、ソビエト教育学研究会の中心的会員として活躍、同時に岐阜県の恵那を中心とした東濃の教師たち、千葉県東葛の教師たちと長い間共同の研究を進め、民間の教育研究運動に絶大な影響を与えてきた。

坂元教授の研究はまことに多岐にわたるが、その中核をなすのは教育思想研究である。

それは一方で、帝政ロシアの革命的民主主義者の教育思想の研究に出発し、ヴィゴツキー学派とルビンシュテイン学派の間の発達論論争など心理学の諸研究をも対象にふくんで、その後の現代ソビエト教育学の思想研究に及ぶ。

また他方で、代表作のひとつ『教育の人民的発想——近代日本教育思想史研究への一視角』にみるように、自由民権運動に代表される近代日本の民主的教育思想の遺産を、今日的課題と結びつけて析出する作業へと展開する。

教育思想成立の基盤を教育実践への志向に求める教授は、現存した（する）教育実践とその思想を分析するが、実践の行われた教室または学校・地域に視野を限定せず、おのおのの時代の人民の教育思想と交差する地点でそれを行うことによって、分析を全面化し深化させる。これは、思想史研究を行う場合にも、現代の教育思想を検討する場合にも貫かれた坂元教育学の基本的な方法で

ある。そして、その根底には、時代のあらゆるものをもっとも敏感に反映する子ども・青年の認識と感情、総じて人格の発達危機およびそこに潜在する発達の契機を、するどくつかみとる抜きんてた直観があり、彼らへの限りない共感と愛がある。

坂元教授がこのところ継続的に力を注いでいるフランスの心理学者アンリ・ワロンの人と業績の研究、「感情の教育学」形成のための旺盛な理論作業（その萌芽は革命的民主主義者の教育思想研究にすでに見える）、さらに大学院生を指導してすすめてきた社会階層と教育要求の関連についての調査研究は、そうした方法、方法意識の具体化であり発展であるにちがいない。

坂元教授は、まず直観によって問題を把握し、関連する膨大な書物群を猛スピードで読破し、それを研究に生かしていく研究者である。ご自宅の書斎はまさに書物の山で、入り口の引戸はすでに少ししか開かず、アクロバティックな所作なしには、中に入ることも愛用のパソコンにたどりつくこともできない状態になっているらしい。

学生・院生の指導においても、相手（学年）の如何にかかわらず、次から次へと読んだ本を紹介し、議論に引き入れ、ひっぱっていく。ゼミの合宿を年間に何回も行い、夜が白み、若者たちが疲れはて眠くなっても、なお議論をやめないのを常とした。

わが教育学研究室にとって、坂元忠芳教授を擁することは、内にあっては大きなささえであり、外に向かつては誇りであった。同教授が去られるのはまことにさびしい。だが今は、長年にわたるご指導に深く感謝しつつ、教授のキャパシティにふさわしい、より豊かな時間と広い空間に、いさぎよく送り出すほかはない。